

信 毎 俳 壇

神野 紗希 選

裸木の幹持こそこの樹液音

(長野市) 武田 芳子

冬黒姫鉛筆書きの風の音

(長野市) 斎藤 俊幸

落葉掃く姉の墓まであと僅か

(阿南町) 宮嶋 良光

値引き品抱える夜道舞う小雪

(長野市) 青木 武明

製麺のバイト凍星瞬きぬ

(松本市) 伊藤 和夫

西の風冬雲奔る早さかな

(飯田市) 大石 昭重

くりすますじえりーびーんさんたさんにあげる

(中野市) 風間 一乃

年の瀬や猫はつくりと野を行けり

(飯綱町) 坂井 寿男

はや四日珈琲の香を京の路地

(飯山市) 田中 琢雄

紙上句に友の便りや年暮るる

(長野市) 富沢 義親

佳作

レノン忌やイマジン聴きつつ陣子張る

(長野市) 野原しおん

山茶花や日の出の運き山の村

(南牧村) 吉沢 永子

選評

一句目、枯れたように見える裸木にも、水が通い命が通う。吸い上げる樹液の音こそ裸木の幹持だと、その乾立を詠み上げた。二句目、冬の黒姫山の風の音を鉛筆書きになぞらえた。摩擦する有機的

な音。モノクロのデッサンのように、風景が手触りをもつ。三句目、慕う心が、落葉を掃くという無言の行動に滲む。四句目、値引き品を抱える切なさ、夜道の小雪の心細さ。物価高への対策はまだか。

坊城 俊樹 選

鼻孔の太きを扶ふ福達磨

(佐久市) 真山 邦弘

貨車鳴く夜鉄黒々と凍てにけり

(須坂市) 富田 孝弘

御負け付き宝飾買ふ年の暮

(長野市) 白鳥 寛山

避難所の空真青なる枯木かな

(東御市) 大塚久仁男

冬晴や虚空蔵まで喝采す

(高山村) 五味 力

雪しまく飯山線のひとり旅

(長野市) 中沢 義寿

そこひ癒え豆選る妻の小春かな

(佐久市) 木内利一郎

骨盤の冷めぬ重みや寒日和

(佐久市) 町田ゆかり

冬さるる絵画が語る無言館

(松本市) 小松 久志

沁み渡る寒さに筆の硬さかな

(伊那市) 中村 初治

佳作

砂遊びなかなよしよし寒雀

(佐久市) 伴野チツ子

新米が古米となりし去年今年

(大町市) 原田 勝

選評

一句目、福達磨とは鼻の穴が大きいほうが良いという事は知らなかった。大きく息を吸う必然性から来たものらしい。確かに健康な達磨でなくては。二句目、そもそも貨車とは鉄で出来ている。それ

が軋み鳴く夜はさぞかし凍てて寒い夜であろう。三句目、宝飾にオマケが付いているとは知らなかった。日用品やお菓子などが抽選で当たるらしい。外れ券の敗者復活となるのだそうである。

今井 聖 選

十二月買収される会社の灯

(東御市) 大塚久仁男

不凍栓確と差し込み年用意

(岡谷市) 吉池富貴男

着ぶくれて市電の窓の曇りけり

(小布施町) 浅岡 茂

アンモナイト令和八年初日の出

(白馬村) 確井 つね

レジ横の焼芋ひとつ追加せり

(松本市) 伊藤 和夫

吾の座に保護大すわる小春かな

(佐久市) 木内利一郎

冬魔の体に薬匂ふなり

(上田市) 竹内 創造

気が向けば少し窓拭く年用意

(佐久市) 西田 和彦

土偶また眠りしままかこの枯野

(飯綱町) 小林 紀子

寒風の乾布摩擦と詠ひかる

(長野市) 武田 芳子

佳作

湯湯婆や祖母に抱かれし夜のぬくみ

(松本市) 中村 百仙

やつやくに嫁ぎし娘聖葉切る

(伊那市) 鈴木 秀雄

選評

一句目、買収されることが決まった会社の窓に灯が点っている師走。社員に幸あれと祈りたい。二句目、地域の生活環境は自然の影響を強く受ける。改めて風土と生活の関係を思う。三句目、着ぶく

れることと窓が曇ることは直接の関係はないが感覚的に良くわかる。市電の内部に暖房が効いているのだ。四句目、現在只今の刹那から思いは太古の昔に飛ぶ。時間は永遠に繋がっている。